
東方槐無夢

ジラート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方槐無夢

【Nコード】

N2043Y

【作者名】

ジラート

【あらすじ】

東方の永琳と夫婦喧嘩したかったからはじめた。

なお出るキャラ全て好意的に見られるのは個人的に非常にむず痒い為、性格不一致による嫌悪・敵対関係などもありハーレムな展開はない・・・と思う。

まあそんなこんなで暇な方はどうぞ

1話　そして彼女は来た（前書き）

えーりん！かわいいよ！えーりん！

1話　そして彼女は来た

雪が降りそそぐ昼下がり、俺は同じ職場の先輩に話を持ちかけた。

「ほう、最近寒気が感じると？」

「ええ、いや風邪とか熱とかはないんですよ」

冬は本番であるが、むしろ秋から冬にかけての期間が一番風邪を引きやすい。

というか冬本番になれば馬鹿をしない限り風邪など引くまい。

3

先輩は言葉を先回りされたのか小さく「ふむう」と呟いた。

普段から鋭い瞳をさらに引き絞り右手の人差し指で軽く唇を撫でている。

先輩独特の癖で何かを考えるとよくこのモーションをとるのだが、傍からみるとかなり怖い。

傍から見るとガンつけているようにも見えなくもない。

視線が異様に鋭い以外は完璧なのだ、顔のパーツもいいし、性格も堅実で気配りできるタイプ。

が、その瞳の鋭さが災いして先輩が何か話すたび、皆背筋を伸ばし直立スタイルをとるのである。

……主任ですらそうなのだからもはや救いようがない。

そういう俺も最初はその目線にビビッて同時入社した同僚の中で一番腰が引けてたが、今では一番仲がいいのもその先輩である。

世の中わからんもんだ。

そんな先輩は俺の質問を程よく咀嚼したのかこちら目を向けた・・・
・・つもりなんだろうな、睨んでる様にしか見えないが。

「もしかして、アレか？」

ぬ、鋭い。

もうちょっと話が二転三転するかと思ったが、いきなり確信をついてきた。

さすが先輩、無駄にハイスペック。

軽く目を見開いている俺に先輩はすつと目を細めた・・・こえーよそんな俺には目もくれず先輩は口を開いた。

「幽霊でもでたか？」

そうである。そうなのである。

真に遺憾ではあるがこの俺には多少ではあるが靈感というのが存在する。

別に欲しくもなかったが、母親の叔母にあたる人が昔霊媒師をしていたそうな、胡散臭せえ。

そしてそれに血の流れを汲んで俺にもそういう才覚に目覚めたといいたいのだが、異能は女に強く受け継がれる性質を持つという。

まあ端的に言おう、要するに単純に勘が鋭い程度である。

幽霊もほぼ見えない、たまに視線の端に居るはずのない人影が歩い

てたり、視線を向けられて背筋が凍ったりその程度である。
むしろ妹のほうが血をよく受け継いでいる。

二人で買い物に行った際、突然悲鳴を上げながら走り出す妹を俺は
呆然と見ている事しかできなかった。

そんな事情をしる先輩がその結論に至ったのは別に不思議でもなん
でもない、先輩からしてみれば当然なのだろう。
とはいえ、

「うあ、正解です。いきなり確信突きますかね」

「お前の悩み事なんてそれくらいしかないと思ってたけどな」

うるせいほっとけ！

心の中で軽く突っ込みを入れ、仕事用の書類まとめる。
今日中にこれを済まさないと帰れない。

「俺にだって色々悩み事くらいありますよ」

「で、いつごろそんなことがあったんだ？」

「5日前くらいの事ですが・・・」

その日俺は目覚ましよりも先に目が覚めた。

（なんだ？）

最初に疑問を持ったのは不思議と冴えた頭と、氷水につかった直後のような寒気。

俺はこの感覚は知っている、幽霊が寝込みを襲ってきたのだから忘れるという作業の方が難しい。

心臓は速く、体は熱く、意識は冷たく
瞳孔が開いた

初めて俺ははつきりとした形で幽霊を見た、視界の端に銀髪の女性が探るような瞳でこちらを見つめていた。

ここまで語ったのだが先輩の反応は相変わらずクレバーだった。

「ふーん、けど前に比べたらましだな」

そういう問題でもない気がするが、俺は話を合わせておく。

「前は完璧に寝込み襲われましたからね」

「で？」

そこで先輩は話を切ってこちらに鋭い視線を投げつけた。

「それくらいじゃないよな？お前はさつき『最近』といったし、そもこの程度じゃ俺に相談すらもちこまないだろ？」

ええい、本当に鋭い。

先輩にとって目の鋭さと物事の本質を見切る鋭さは同類項なのだろうか。

「そのとおりです。それからちよくちよく寒気がして・・・特に朝とかですねえ・・・・・・・・」

朝夜の境界線。

幽霊とは精神体である。

そして精神体である以上、俺たちに物理的に干渉することは出来ず、精神での干渉が精一杯なのだ。

さらに言つとその精神干渉自体も、人が精神的にも肉体的にも健全であれば侵入することすらままならない。

せいぜい相手の精神と意識の狭間でしか干渉出来ず、仮に人が意識してみようとすると霊体自体の精神が人の精神に弾かれ見えなくなる。

なら人が寝てたら無防備では？

と思うだろうが人は寝ると意識と精神が完全に自分という殻に閉じ

こもり、情報の最適化を行うのである。
その間ほぼ全ての感覚シャットアウトするため、霊体に付け入る隙を与えない。

「しかし・・・朝夜の境界線。覚醒と休眠の狭間、この瞬間こそ霊体が人に干渉する唯一の時間」

それ故に俺はこんなにも苦しまなければいけない。
こんなに苦しいのなら、こんなに辛いのなら・・・

「霊力などいらぬ！」

そんな全身全霊をこめた俺の嘆きを先輩は面倒くさそうに眺めながらポツリと呟いた。

「で？どうすんだ？」

ゆがみねえ

「とりあえずお札とか張ってみますよ、うちの曾婆ちゃんがアレだつたんでそれなりにコネ持ってるんで」

「そうかい、じゃあ一件落着だな」

「しかし嫌な予感しかしないです」

「勘か？」

「勘です」

「そうかじゃあ当たるな」

うぼあー

デスクに突っ伏す俺を片目で捕らえつつ、先輩は自分の仕事に戻っていった。

目が覚める。

俺は布団を顔まで被りながら再びきつく目を閉じた。

視ている。

誰かが。

布団越しに視線を感じる。

何か居る・・・

俺は札の効力の無力っぷりに歯噛みしつつ、口の中でもごもごもこと原稿用紙一枚分の文句を呟いて、絶望した。

（こ、怖い・・・）

得体の知れない何かが俺を覗き込んでいるっただけでもうたまらない、勘弁してくれ。

人なら何とかなる、物理攻撃に物を言わせれば済む話だ。

（けど、霊体ってどうしたらいいの？）

俺は霊媒師でもなければ悟りを開いた僧でもない。

一応覚醒状態になれば干渉は早々受けないとわかっていても怖いものは怖い。

（布団からがばりと跳ね起きたら至近距離に怨み積もった女の顔・・・無理だ！怖すぎる！現状維持！）

そういつて再び目蓋に力を入れるも状況はまったく好転しない。当然である、行動しなければ進展も後退もない。

（し、ししかたない、もうやけだ！１・２・３で飛び起きる、やるぞお！）

1

2

・・・3！

布団を力の限り跳ね飛ばし、視線があつた方向に目を移す。
一気に肺に空気を送り込み、一息に氣力を練りこみ、一声により全
てを吹き飛ばそうとした・・・・・・はずだった

「う・・・・あ？」

そこには白銀の髪と赤と青を基調とした服を着た女性がたっていた。

彼女の姿を見た瞬間言葉を失った。

吸い込まれるように彼女の瞳を、顔を、全体を見て取った。

心臓が高鳴った、狂おしいほどの情熱で

頭が萎縮した、彼女以外の全てがどうでもよくなって

そして、俺は彼女の声聞いた。

（いた）

そういつて彼女は姿を消した。

何を？
何が？
何で？

あらゆる疑問符が頭の中を渦巻いたが、それを思う自分の気持ちはひどく客観的だった。
それほどまでに俺は彼女に心のあらゆるものを奪われた。

俺は何を考えるもなくベッドに突っ伏した。
ただただ体が休息を求めている。

勘は当たったのだろうか。それとも外れたのだろうか。
よくわからないまま俺の目蓋はそのまま落ち、同じく意識も落ちた。

「す、すいませんでした！」

そして俺はものの見事に遅刻した。我ながらあほ過ぎる。
直立角度45度の形で頭を下げてる俺に先輩は方眉を上げた。
二人の間に微妙な沈黙が流れる。
最初に口を開いたのは先輩だった。

「昨日言ってたアレのせいかな？」

どうやら先輩は昨日のことはよく覚えていてくれたらしい。
ほんと細かいところまで気配りができる人だ。おそらくここで俺が
『アレのせい』と一言でいってしまえば先輩は事情を察して何かし
ら主任に一言言ってくれるだろう。
理解の深い先輩を俺は心底尊敬している。
しかし、だからこそここで甘えるのは俺が許せん。

「いえ、例えそうであつても俺が遅刻した事の原因にはなりません」

先輩の瞳が鋭くなり、俺に不気味な威圧感与えてくる。
それでも俺は視線をそらすことなく見続ける。
いや、今なら全てのものを恐れず見つめれるに違いない。
昨日の出来事は俺の何かを変えたのだった。

「そうか、じゃあ主任に謝ってこい」

そういつて先輩は自分の仕事に戻っていった、口元に苦笑のような笑みを貼り付けながら。

そうして俺は出会った。

彼女に一世一代の恋を託した。

そして、
彼女は来た

1話　そして彼女は来た（後書き）

どうも皆様、二次創作は初めてです。

それ以上に怖いです『特定しました^^』って書かれたら・・・
オリならともかく二次は特定されたら死ぬ以外の選択肢が見当たらない

2話 なんじゃそりゃ？（前書き）

えーりんもつと出したい
早く幻想入りたいなあ

2話 なんじゃそりゃ？

仕事の中俺はずっと彼女のことを考えていた。

枕元にたっていた幽霊に恋している。

白銀の髪に透き通った黒瑪瑙のような瞳、体からあふれる気はとも幽霊の様には見えず、生气に包まれているようだった。

（もしか彼女は生霊ではないだろうか？）

落ちていた今でこそそう思うがこればかりは本職でもない俺にはわからない。

しかしあそこまではつきりと幽霊を見たのは初めてだ。いつもは半透明な人影で、性別と年齢くらいしかわからなかったからな。

軽く背伸びをして腰を伸ばす。デスクワークは肩と腰に来る、後尻痛い。

（つまり彼女は覚醒中である人間の精神力に、進行出来るくらいの精神生命体であるということか）

ぼんやり考える、いかに生霊でも覚醒状態の人には干涉なんて出来ない。

そもそも生きた人間に干涉できるモノ、例えば有名な心霊スポットなんかは多くの精神エネルギーの集合体である。

その不特定多数の精神体が冷やかにやってきた少数の馬鹿どもをいっせいに攻撃することにより、即効性の干涉が可能になる。

逆にこれが数多の馬鹿どもになると精神体も手がつけられない。地

力から違うのだから数を揃われたらせいぜい意識の隙間をぬって嫌がらせのゲリラ戦法しか通用しない。

しかし彼女は単体で米粒ほどの霊力しか持たない俺に対してとはいえ、干渉を行うことが出来た。

となると彼女に強い思念があるか、彼女自身にすさまじい霊力が宿っており、他者に介入することが出来るか。

（ってどんな呪術師だよ、前時代過ぎる）

そんな霊力とか精神力とか意味不明な謎エネルギーを頼るくらいならもっと他にすることあるだろう。

コップを謎エネルギーで動かすのに50年修行して体現できたとしても、物理学的に鑑みると指先ひとつで体現できる。

阿呆臭い。幽霊なんてものに逐一気を配る労力を費やすのなら、人間関係に費やしたほうがよっぽど健全적이다。

結局出た結論は、生きた人間のほうがよっぽど厄介だ、ということだろう。

アレは白昼夢と認定してさっさと忘れた方が得なのさ。

そう言い聞かせて体から競り上がる憧憬の炎を無理やり鎮火させる。ちくせう、わかっている。俺はそんな幽霊に一目ぼれしてしまった。

頭を抱える。

俺、もしかして生気吸われてる？

そのとき俯いてウンウン唸っている俺の首元に衝撃が走った。

痛い！と思う前に俺の意識が電源コードを抜いたテレビのようにぶ

つりと途切れる。

「起きろ、食事の時間だ」

先輩そういつて彼にグラップラーばりの手刀を一撃見舞わせ一人肩で風を切りながら食堂へ向かっていった。

もっとも意識が完全にブラックアウトしている俺の耳には届かぬ台詞ではあったが・・・

俺の働く会社には社員食堂なるものが存在する。

その日替わり定食は外で飯を食うより半額の値段で食べられるということでそこそこ人気だ。

何故そこそでしか人気がないのかというと、

「うげえ今日も揚げ物かよ」

そう、食堂調理の手抜きなのかしらないが圧倒的揚げ物の多さ。こ
つてりとしたものが多い。
その結果女性社員には不評で、よく弁当持参で屋上にたむろするの
を見かける。

今は冬なのでどっか適当に場所見つけて食べてるんだろうけど。

「とりあえずAセット」

と、から揚げをチョイス。

「俺はBで」

対する先輩はカツ丼。

そういつて先輩は財布を取り出した、今日は先輩のおごりだ。
手刀で意識を刈り取られ白目を剥いた俺に対して昼飯を奢るだけ、
というのはふてえ野郎だが、仕方ない。俺は平和主義者なのさ。

トレイを片手に窓際の席は・・・残念埋まっている。
仕方ない、中央右よりの席を陣取りそこに座った。

「いただきます」

最初は味噌汁で口を湿らしから揚げに箸を伸ばす。
・・・うむ、うまい。
ただ揚げ物だけなのはいかなものか？

「さつきは何を悩んでいたんだ？」

先輩が備え付けのお新香に手をつけながら聞いてきた。
どうやら頭を抱えて唸っている俺を不思議に思っているような感じ
だった。

「俺が深く悩みこんでたらだめですか？」

そう思われるのも癪なので少しジト目で講義の声を上げた。
といいつつも俺の眼力程度では先輩をうるたえさせる事など到底出
来ない。
犬を相手ににらみ合いした方が成功率はよっぽど高いだろう・・・
やらないが。

「ああ、お前結構即決タイプだったよな。お前がそんなに悩むのは
よほどだろう？」

そんな事は・・・あるな。

なるほど、だからよく悩みが少ないと言われるのか。

一人納得したもののどう説明したらいいものか、少し考える時間をもらったためコップに入った水を一息で飲みほす。

再びコップをトレイの上に置いたとき、腹を括って全てを打ち明けようと思った。

というのも俺の体質を知っているのが先輩くらいなものだからである。

俺は今朝あったことを全て話した。

幽霊がまたもや現れたこと

その幽霊が銀髪の美女だったということ

そしてその彼女に一目ぼれをしてしまったということ

食堂で話す会話ではないなと思いながら、先輩に語った。

そして俺が忘れようとしても忘れられないということも。

それを先輩は訝しげな表情を浮かべることもなくまじめに聞いている。

なにこの人、かつこいい。

「呪われたんじゃないか？」

俺の話が終わった後、いつものように口を触れながら俺が現時点思っていたことを実に分かりやすくいった。

そりゃ誰だってそう思う、俺だってそう思うよ。
しかし・・・

「俺もそうは思っちゃいるんですがね、どうにも」

思って現実化するなら世の中どんなに幸せだろうか。
世界はハーレムで包まれるだろう。

「不毛なことだとは分かってはいるんですよ。幽霊に恋するなんて
漫画の登場人物に恋するのとなんら変わりませんからね。いや、む
しろバッドエンド用意されてる分だけ幽霊のほうがたちが悪いかも
しれませんね」

それでも・・・と俺は続ける。
あの時出来た気持ち、その思いは間違いなく俺の心から生まれたも
のだと信じている。
それだけは否定されたくない。俺はこの思いを大切にしたい。この
一世一代の憧憬にも似た恋心を。

「で？どうしたいんだ？」

先輩がそう聞いてきて俺は少しあわてた。しまった完全に自分の世
界に入り込んでしまった。
さて「どうしたいか？」か・・・どうしたいんだろうな、俺

バッドエンドしか用意されてない道に行くか行かざるか、つまりはこういう質問だ。

本来なら見えてる地雷を自ら踏みにいく必要はない。

「わかりません。ただもう一度、会うだけでいい。会いたい」

そしてそれが出来れば苦労はしない。

その地雷は見えているものの、その向こうには俺が求めてやまないものが存在する。

俺はその姿を齒軋りしながら見るしかないのだ。

だから最後に一目、そう区切りをつけたいのかもしれない。

二人の中で短くない沈黙が続く。

本当、食堂で何を話してるんだろう。

俺はこっそりため息を吐いた。

「お前シューティング好きだったっけ？」

と、先輩が突然話題を変えてきた。
なんだ？ いったい何の話だ？

「いや、好きじゃないです」

残念ながら俺はシューティングが大の苦手だ。

小学校のときギャラガやツインビーなど、ファミコン特有の高難易度を最初にやったばかりに俺の心をぼつきり折られた代物だ。

残念ながらいまでもそのトラウマが俺の中にはある。

そんな俺の返事を無視して先輩は執拗にシューティングゲームを勧めた。

「東方Projectって知ってるか？」

「はあ、俺の中での東方はアジアだけです」

若干引きながら俺は答える

「そうか、知らんのか」

だから何なんだよ。

とりあえず、先輩の話を聞いて三行で答えるなら。

- ・音楽がいい
- ・綺麗且つ優秀な弹幕ゲーム
- ・キャラもいい

の三点。とりあえずお前もやれのな。

そうだった先輩はコアなシューティングゲームだったなあ
なんかまえ生き生きと『蜂』倒したとか言っていた……蜂？

「シューティングゲームはいい。集中力がつくし、その瞬間だけだ
が何でも忘れられるぞ、色々な」

そこまで言われて俺はようやく気がついた。

先輩は彼女とは別に、より興味を持つようなもの作ったらどうだ？
と言って来ているのだ。

まあそうであつたとしても

「シューティングだけは興味は持ちませんよ」

「前貸した神威どうした？」

「埃が友達」

「しね」

ま、先輩が俺を心配してくれてるとわかっただけでも御の字か。
とりあえずシューティングも前向きに検討しよう。ありがとうござ
いますよ。

感謝の言葉を口に出すことなくかみ締めつつ、俺らはくだらない言い合いをしながら食堂を出て仕事場へと戻っていった。

その日の帰り、仕事が終わり今日は家で何食おうかなと思いを馳せていると

（ん？部屋の電気がついてる？）

アパートで一人暮らしをしている俺をいつも出迎えてくれるのは常に冷たい暗闇だった。

嫁がいればさぞかし楽だろうに、普段そう思いつつも一人の気楽さを満喫していた俺ではあったが今日に限って部屋の電気がついていた。

（友達でも勝手に入ってきたのかな？もしくは電気を消し忘れたか）

俺はそう思いながら部屋の扉を開け——固まった。

・すでに部屋には先客が居た。

いや、それは選択肢のひとつにあった。

・その先客は女性だった。

俺の母親かもしれん、今は彼女いないしな。

・その先客は見られるような銀髪をしていた。

なんじゃそりゃ？

そう、まさになんじゃそりゃ。それ以外の感情が湧いて来なかった。

今朝に見た女性の幽霊。

その彼女が今実体を持って優雅にお茶なんぞ啜っているのである。

陸地に打ち上げられた魚のように口をパクパクさせている俺に彼女が振り返る。

視線があつ。

にこり

笑いかけられた。

どばぁぁん！！！！

反射的に扉を閉めアパートの部屋の番号を確認する。

大丈夫だあっている。間違っているのは彼女のほうだ。

いや、それとも俺の頭がネジがなんか間違っていたとか？

状況を正しく認識できない。

意味不明な羅列記号が俺の頭を埋め尽くし過負荷をかけていく。

やめてくれ、俺の頭はそんなによくねーんだ！

傍から見たら気持ち悪いくらいに狼狽している俺の混乱をさらに一回りヒートアップさせたのは部屋の中に居る名も知らぬ美女だった。先ほど蝶番が壊れてしまうほど激しく閉めた扉が開き、銀髪的美女が顔を覗かせた。

一歩後ずさる俺に彼女は声をかけた。

「入らないんですか？」

綺麗な声だった。聞いただけで背筋を伸ばしてしまうような。

『女教授』そんな言葉が俺の中に瞬いた。

もしかしなくても『痘痕も笑窪』状態。彼女の行っ全てが好意的に感じる。

うおー静まれおれー

そしてその言葉に反応することが出来ずに呆然とする俺に彼女は言葉続ける。

「立ち話もなんです。中で座ってお話しませんか？」

と、部屋に手招きする。

そこは俺の部屋・・・という突っ込みは脳内で完結し、俺は混乱の収まらぬまま自らの部屋に入ってしまった。

2話 なんじゃそりゃ？（後書き）

やべえ

ばれるビジョンしか浮かばない
人知れずこっそりやろう

3話 いい脚本家になれるぞ俺（前書き）

仕事の時間だからさっさと投稿、後主人公の名前決定でもないほうがよかったような気がする

えーりんマジ高嶺

こっからすこしずつ攻略していきます

『（相手が）攻略される』の方が好きな人はちょっとつらいかも
少なくとも永琳はがんばって落とします、他はしらね

3話 いい脚本家になれるぞ俺

家に唯一のテーブルになんとたまらない玉露の香りが漂う。

かく言う俺の前に湯飲みが置いてあるのだが、俺は手をつけずに正座のままじつとその湯飲みを眺め続けていた。

家なのに何故正座？

とか

早く飲んでしまわないと香りが飛ぶ

とか

今はそんなことミジンコの生態系と同じくらいどうでもいい。

そんなことよりこの家の家主よりゆったりと寛いでいる女性のほうが問題だ。

いや、問題ではないんだよ。

むしろ俺が今日半日『こうなればいいなあ』とか思っていたことが現実になった、実に喜ばしい。

だが考えて欲しい。

例えば一匹の犬が大空に思いを馳せていたとしよう。

その犬は鳥のように自由に飛びたかったのである。

しかしそんなことは犬には出来ないし、もっというと羽もないのにどうするの？と諦めていた。

そんなある日、いつものように縄張りを練り歩き、一定間隔で生え

ている細長い石の塔にマーキングを施してい時、突然その犬の体から羽が生えて大空へと羽ばたいたのだ―

どうよ？その犬までもでいると思うか？

俺は思わん。

突然の出来事にあわくってキャンキャン吼えるか、飛び方も分からず自然落下するのが落ちだろう。

そして俺の状況はまさしくそれだ。

突然の出来事にあわくってキョロキョロと挙動不審に視線を動かし、対応の仕方が分からず沈黙するのが精一杯。

とある小説の登場人物でキヨンという高校生が自ら宇宙人だと証する長門に対して「正直言おう。さっぱりわからない」と放った台詞は今の俺にぴったりと当てはまる。

そういえばシュチエーション的にあの状況とまったく一緒だな、実にめでたい。

こんな状況下に追い込まれた人間の最善策がすでに文章化していたなんて、心よりめでたい。

しかしリアルでやられるとこんなにテンパるとはな。キヨンお前すごいよ。

いやいや、状況をとにかく好転させないと、とりあえず教科書通りお茶飲んで褒めよう。それが一番だ。

そう思い湯飲みに手伸ばし、動きを止めた。

自分の部屋に違和感を感じたのだ。俺の部屋、こんなにきれいだったか？

そう思ったとき彼女が声を上げた。

「ああ、ごめんなさいね。この部屋少し不衛生でしたから、掃除させていただきました。ものの配置は変えてないつもりですし、なんでしたら元の状態に戻すことも可能よ?」

あれ?俺まだ何もいつてないよ?

「ふふ、不思議そうな顔ね。けどあなたの顔にかいてあるわよ?」

うん・・・うん?

あれ?これ俺が分かりやすいつて話なの?

それとも彼女の洞察力が異常つて話なの?

今度は俺の頭が幾何学模様で埋め尽くされる。若干『?』が多いのがご愛嬌。

そんな俺をくすくす笑いながらすつと体の姿勢を整えた。

その仕草に俺は少なからずときめいた。さて、俺今日でなんどくらいときめいただろう?

「では自己紹介からいきましようか。私は永遠亭、蓬萊山輝夜に仕える月の民『八意 永琳』と名乗っているわ」

そういつて柔らかい風が頬を撫でるようにふつと微笑んだ。一瞬くらりときたが顔を引き締める。

「は、お・・・私は『槐さいかち隆治』と申します」

そしてこれが彼女との初めての会話だと気づいたのは、もう少し時間を要することになる。

彼女が部屋を出て初めて俺は足を崩した。

今首を左右に曲げるといい音になりそうな気がする。

「ふう」

緊張した。心臓がいつもの1・3倍のリズムで鼓動を刻んでいたんだろうと思う。

これは夢じゃないかと何度も自問自答したし、こっそり太ももの肉をつねったりして確かめたりもした。

今彼女は晩御飯の食材を買いに行っている。

どうしてこうなったと言われれば、俺が腹減ったからだ、というしかない。

いや、本当は外に晩飯を誘ったのだ。時間的にも彼女もそろそろ腹減る時間だし。

しかしそんな俺の提案を彼女は『のー』といった。彼女いわく

「外の世界の食事に期待するべきところはない」

とのこと。俺らは某英国人か！

文句ひとつでも言ってやろうかと思ったら「だから自分で作る」と宣言した。

本来なら俺も付き添って荷物をもち、お金も無論俺がはらうべきだ。そう、たとえ彼女が少々奇抜な外観センスを持っていたとしても。

しかしそんな情けない事に俺はとにかく時間が欲しかった。彼女『
八意さん』からもらった情報を整理する時間が。

彼女との自己紹介したとき、正直彼女の話の内容はまったく分からなかった。

永遠亭？

定食屋さんか何か？

蓬萊山輝夜？

どっかで聞いたことあるなあ

月の民？
意味不

分かったのは彼女が『八意 永琳』ということだけだった。
そんな俺に対して彼女は一つ一つ丁寧に教えていった。

いわく永遠亭とは蓬莱山輝夜と呼ばれる姫が居を構える場所で、普段は病院として一般に開放されている。
そして月の民とは遠い古の時代に地上の穢れを恐れて月に移民したものの事を指すという。

彼女が言っている事を全て鵜呑みにするのなら、月から降りてきた宇宙人という事になる。

やべえ、さっきのシュミレーションは設定すらも合っていたということか。

事実は小説より奇なりだなあ。

と、ここで自分の身に起こっていることがひどく他人事のように感じたのだ。

正直に言っただけだといっても過言ではない。

だってそうだろう。あまりにも話がとっぴ過ぎる。

自分のことを月から来た宇宙人となのつたなら、それなりの証拠とやらを提示してくれなければそうそう信じようとは思わない。

「八意さん、そこまで説明してくださってありがとうございます、生憎・・・私は永遠亭や蓬莱山輝夜姫。ましてや月に人が住んでいたとは全く聞いたことも見たこともありませんが」

というわけで俺も少し探りを入れてみることにした。

こう言われれば彼女も何かしら情報を提示してくるだろう。

彼女はいつたい何のために俺の前に現れたのか、それば今のところわからない。

最初の出会いがあんな形だし、堅気ではなさそうだし、なによりいきなり俺の部屋に入り込んで『種族：月の民』を真顔で言う人物である。

・・・正直ドッキリって言われたほうが安心する様な展開だ。

収まらない混乱をよそに彼女は少し疑問に思ったように言葉を繋いだ。

「『幻想郷』というのは知らないのかしら」

「『げんそうきょう』ですか。いや、お・・・私の辞書にはそんな言葉ありませんが」

「あら、そうなの？それなりに有名になってるって聞いたんだけど」

「はあ？有名、なんですか？」

「いいえ、こっちの話よ。そうね・・・では続けて話をしましょうか」

そういつて彼女は右手を豊満な胸の位置にまでもっていき、掌を上に向けて

「っ!？」

思わずのぞけると、同時に理解した。

何故生霊姿の彼女がこの俺にも目視することができたのかを。

彼女の掌には高純度の霊力が塊となって浮いていた。

俺が50年の歳月をかけても到達しきれないと思っていた物の完成形が目の前にあった。

「これはそちらにも多少馴染みがあるでしょう」

彼女はさも当たり前のようにこういった。

確かに俺には多少だが霊力が存在するが馴染みあるかと言われれば「そんなのある分けない!」といってやりたかった。

しかしそれ以上に、俺は今ある現実を受けとめるのに精一杯だった。そんな俺の沈黙を彼女は肯定ととり、話を続ける。

「私の現状の居場所は『幻想郷』と呼ばれるところに存在する。そこは人々が忘却の彼方へ追いやった様々な物の終着点。時には妖が、時には神が、そして時には人すらも。幻想と化した全てのものを受け入れる郷。忘れ去られた存在や技術が支配する魔境よ」

彼女は手に平にある霊力の塊の消し再び言葉を紡ぐ。

「そして私はあなた、槐 隆治を幻想郷へ誘いに来た」

そういつて、彼女は先ほど霊力を消した手をこちらに差し出した。
それは母親が小さな子を正しく教え導く手のように
それは嘆きの亡霊が黄泉へと引き摺る手のように
それはこちらを誘い込むように差し出した

「あなたの答えを聞きたいわ」

俺は反射的に彼女の手をとりたかった。

感情の赴くまま、先のことなど考えず、己の欲望に忠実に行動した
かった。

しかし俺の理性がそれをとどめ、その疑問を口にした。

「……何故、俺なんですか？」

訳がわからない。

確かに俺は霊力を持っている時点で他の人よりは違うのだろう。
しかしそれでも俺が選ばれる理由ではない。

となると本職に霊媒師をやっている人なんかどうだって話にもなる
し、徳の高そうな坊さんとかいの一番に呼ばれるべきだ。
俺の疑問に彼女は俺を覗き込むように見て、

「私の遠い昔の縁よ。そしてあなたはその血筋。あなたの魂、霊力、そして遺伝子構造にいたるまで、その類似点多すぎるわ」

しかしそれは俺以外のものを見るように彼女は答えた。

「そして私はあなたの影を追ってここまできたの。納得できたかしら？」

ああ、納得したとも。

それと同時にひどく失望した。

そう彼女は目の前に居る『俺』には目を向けず、名も知れぬ奴の影を俺に合わせてみていただけだったのだ。

そりゃそうさ、そうじゃなきゃ彼女ほどの人が俺になんて手を差し伸べてくれるはずなんてないのさ。

なんだ、なんだ。かつこ悪いな俺。

勝手に一人で舞い上がって、勝手に一人で落ち込んで、情けない。

思わずため息が出た。

「どうかしら、そろそろ答えが出た『クー』で………？」

と同時にお腹がなった。

そういえば緊張で色々忘れかけてたが、そうだ。俺は帰りながら晩飯の献立を考えるほどにお腹がすいてたのだ。

「・・・・・・・・」

・・・ベタだ、気持ちがいいくらベタ過ぎる。いい脚本家になれるぞ俺。

先ほどのブルーな気分がふつとび変わりにきたのがレッド。ハイテンションな主人公のように俺の顔を真っ赤に染めた。

なんとも言われぬ沈黙が場を支配したが、それはふつくらとした笑い声が遮った。

上目遣いで彼女を覗くとクスクスと実に上品に笑っている。

うつ、かわいい。

なんだろう？ギャップ萌えというやつだろうか。

スラリとした性格をした彼女がコロコロ笑うとはそれだけで破壊力がすさまじい。

俺は気恥ずかしさと照れを誤魔化すために、破れかぶれに彼女を晩御飯に誘ったのだった。

そして冒頭に戻る。

さて、話をまとめようか。

彼女が言っていた幻想郷とは

- ・ 忘れ去られた人・神・妖が行き着く場所
- ・ 今はなき技術や存在がある場所
- ・ なんか魔境

・・・あれ？これ黄泉の国じゃね？

俺？死んじゃうの？

忘れられたら逝っちゃうつて・・・死ぬ以外のこと想像つかないんだけど。

とりあえずこれは保留だな。分からないことが多すぎる。

次に月の民。

月は確かアポロ11号だったかなんだかが月面に旗をさしたらしいのだが、その歴史的偉業は真実か虚言かで二つに分かれている。月面着陸した映像は偽者だったとか、月面に到達した彼らを待ち受けていたのは月に潜む宇宙人だ、とか。

あながち嘘とは言いきれないものがある。

確かに人類は宇宙望遠鏡や人工衛星で広い宇宙を知ることが出来たが、それでももし宇宙人とやらが存在するのならその技術力はまだまだ拙いのだろう。

（それに、実際俺が見たわけでもないしな）

本質的に俺は自分の目で見たものの信用する。

他人の話した説明や映像はその人の主観が入るため、どうしても何からのフィルターを通してでしか見る事が出来ない。

（突飛であるのは否定できないが、突飛すぎて逆に信憑性があるよな）

どこの世界に自分は宇宙人だ真顔という人物がいるのであろうか。すくなくともこの日本ではそんなこという馬鹿は鉄格子のついた病棟の一角で体育座りしてることだろう。

がちやり

そう思ったとき彼女が帰ってきた。

「今戻ったわ、さあ今日はお鍋にしましょうか」

なるほど、もし今嫁が出来たらこんな風な生活が可能ということか。素晴らしい、実に素晴らしいぞ！

しかし、なんとも早かったな。

俺の家から一番近い場所にあるスーパーといえども結構時間かかるのに。

飛んでも来たのかというくらい早かった。

しかしそんな疑問は彼女の作る鍋料理の前にはあまりに矮小、俺は彼女の鍋に思いを馳せた。

ちなみに魚介鍋だった。

幻想郷では珍しいらしい、そんなもんか？

味は・・・京の祇園に出されても違和感がないどころか、板前が土下座して「弟子にしてください」といっても俺は全然不思議には思わない程うまかった。

なるほど、悔しいがこれならば「外の世界の食事に期待するべきところはない」と言われてもしかたないだろうね。

その間何度か答えは出たかと言われたが話は保留にしておいた。

俺はまだ彼女の話をして信用したのではない。

勿論別に鍋を食べるのに夢中だった訳ではない、あしからず。

3話 いい脚本家になれるぞ俺（後書き）

お気に入りをしてくださった皆さんへありがとう！

1話投稿してお気に入り登録0ならずさま黒歴史へ葬り去るところでした

おかげさまで逃げ場を失いました、うばあ

でもお気に入り登録してくれるとすごくうれしいです

やる気あがりますよね！

みんなあとがきで「感想よろ！」とかいうのすごくよく分かります
私ももらったらさぞかしうれしいでしょうね

でも同時にptあがりますよね

うれしいと感じると同時に悲しみを背負うなんて役得ですよ！

4話 おかしいな、話が噛み合わない（前書き）

実を言うとタイトル適当に決めました。
どんくらい適当かというと

『東方槐無夢』

どう読みますか？

はい、俺も読めません。
今のところ『かいぶむ』ってよんでる

4話 おかしいな、話が噛み合わない

「うぐう・・・」

外が騒がしい、早朝騒がしいのはスズメだけにしてくれ。

選挙活動もこんな住宅街なんかより大通り出た方がいいんじゃない？

そもそも車から選挙活動って何様？市民の事考えるのなら地に足つけて俺らの視点から物を言え馬鹿者。

カーペットの上を転がり毛布を被りなおすも、体の節々が痛い。

やはり布団が欲しい、カーペット越しとはいえ直接寝るのはつらいなあ。

つーか今何時？

んー8時30かあ

・・・・・・・・・・・・・・・・

「はっ!？」

がばりと跳ね起きる。

こんなに悠長に寝ている時間じゃない！

クラリと軽く目が霞む。低血圧はこれが辛い、頭に血が足りない。目の前を霧が張った様に白く霞む、しかしそれは一時的なもので10秒も待てば次第にそれも晴れていく。

早く仕事に……っああ？

「そうだ、今日や休みだ」

なんてお約束をやってしまったんだろう。

俺は自分の失態を誤魔化す様に軽く頭をかいた。

すでに脳みそに血の通って意識もはつきりしてきたので、再び毛布に包まるという選択肢は間違っているだろう。

ふと窓の外に目を向ける、外はまだ少し騒がしい。

おそらく登校時間になった学生が騒いでいるのだろう、朝っぱらから元気だね。

ポーっとまどろみの余韻を楽しんでいると、いい香りが鼻をくすぐる。

どうやら彼女は既に起きて朝食を作ってくれてるようだ。

素晴らしい素晴らしい素晴らしい、これは実に素晴らしい素晴らしい

昨日魚介鍋を食べ終わった時、それを待ちわびたかのように彼女はこう切り出した。

「悪いけどあなたの答えを悠長に待っている時間はないの。期間は今日を含めて七日間、幻想郷に来るべきか来ざるべきかの答えをそれまでに出しておきなさい」

彼女は食べ終わった箸や皿をまとめながらやや厳しく言った。それだけ重要事項なのだろう、彼女の目は俺を捉えて離さなかった。とはいえ七日、一週間か……。一週間、少ないか？

「七日間つてずいぶんと即急ですね、その日数でないといけない理由でもあるので？」

「ええ、幻想郷には管理者が存在して彼女が提示した日数がこの期間。これを過ぎる締め出されるわね。地力で帰るのは少しばかり面倒よ」

そういつて彼女は洗い物をまとめて台所へ向かった。

「今日残った鍋は明日の朝おじやにして食べましょう」と彼女が片付けの作業をしながら提案する。

ああ、実に楽しみだ。俺はそう答えてごろりと横になった。

なるほど、そういう理由か。

しかし理解は出来たが俺は到底納得できない部分が存在した。幻想郷という場所には管理者が存在し、その人物が忘れ去られた物や存在を選別するのなら、何故彼女は八意さんの行動を容認したのだろうか？

俺は別に孤高でもなければ差異者でもない。それなりに社会に溶け込み、それなりに身を置いている。

そんな存在が忘れ去られた幻想の居場所に行くだって？前提条件からして間違っではないだろうか？

それとも何か、俺が話したところで与太話として処理してしまう気か？

くそ、『管理者』そんな存在がいなければ俺も疑問なんて持たなかったことだろうに。

ガリガリと頭をかく。

しかも驚きなのが俺に一週間とは言え猶予を与えていることだ。

ただ彼女が何かしら駒を欲しがるだけなら簡単だ、攫えばいい。

連れ去る場所は比喻でもなんでもなく、正しく忘れ去られた郷だ。

絶対に見つかることのない場所だといえる。

俺がいたという証明も月日と共の剥離し、微分化していき、最後には消えるのだろう。今回の様に猶予を与えるよりそっちの方がほとんど機密性を高めている。

そうして俺もめでたく幻想と化す、めでたしめでたくなし。

しかし件の管理者は俺に猶予を与え、選択肢まで用意している。

問答無用で攫うことと比べれば破格の待遇、いやもはやそんなレベルではない。これは変革といっていい。

幻想という郷の変革、異様にきな臭い。

さらに言うなら八意さんが嘘を言っている可能性。

俺をどこぞに身売りしてやろうと考えるなら実に都合がいい。

一週間という期間に自らの近辺を整理整頓してくれるのだ、後始末が実に楽だ。

厄介だ、非常に。

どう転んでも俺に厄介ごとしか降りかからない気がしない。

面倒なのか？そうか、じゃあもう答えが出てるんじゃないのか？と自問自答する。

もちろんだとも、断ればいい。簡単じゃあないか。

だが俺はかちやかちやと軽い音を立てて洗物をする彼女の横顔を見つめる。

月光のように澄んだ白銀の長髪に、それを同化したかのように写る白陶器のような肌。

すらりと美曲線を伸びる鼻先とふっくらとした唇、そして彼女の瞳は横顔から見ても吸い込まれそうに大きく、美しかった。

そうだとも、厄介ごとが来るなんて彼女が来た時点で分かっているし、それで納得出来るのなら俺もこんなに迷ってない。

ああくそ、この自問もいったい何回したことが。いい加減はつきりしろ、いつもの俺じゃないぞ、俺！

ごろごろと悶絶する。

満腹に食べ終わったばかりで膨れ上がった胃は抗議の声はあげるも全て無視する。あーうーどうするよ俺え・・・

と、そこではたりととても重要な事項に気づいた。

「そついえば八意さんは期限来るまでどうなさるんですか？一旦幻想某に戻るの？」

「いえ、その予定はないわね。二度手間だし面倒なもの。七日の間は適当にこの場にとどまるわ」

鍋で使った皿を謎の技術で半瞬かけず汚れを消し飛ばしながら、彼女は淀みなく答えこちらに目を向けた。

「嫌なら私はどこか宿でも取るけど・・・」

全力で拒否した、それはもう体全体を使って。

そうして俺は同じ部屋で一夜を共にしたのだった。
俺が床のカーペット、八意さんは俺のベッドで。

別に何かしら如何わしいイベントはなかった。
まあ当然ではある。

しかし今日から後六日間とはいえ八意さんと同居できるのだ。
鼻歌でも歌いたい気分だな。

と、その時俺の携帯電話がけたたましく鳴り響いた。

『刑部 先輩』

あれ？先輩からだ。

今日は先輩は仕事じゃなかったっけ？と疑問に思いながら携帯に手にとり通話ボタンを押した。

「はいもしもし、槐ですが」

『ああ、今起きたか？』

「いや、大丈夫です。それでなんすか、先輩今日仕事ですよね？」

『ああ、いや・・・そうだな』

先輩にしてはいやに歯切れの悪い言い方だった。

今頃携帯片手に唇を撫でていることだろう、実に分かりやすいなあ手に取るようだ。

そんな上機嫌且つ余裕綽々な俺に先輩は突然冷水をぶっ掛けてきた。

『もしかするとだが、八意 永琳って女性がお前のところに来なかったか？』

・・・・・・・・・・

数秒、俺の思考はショートした。

数々の疑問が振って湧いてきて収拾がつかない。

いかん、だんまりはまずい！何か話さなければ！

俺は手当たり次第に湧いてくる疑問の一つを手に取り投げつけた。

しかしその疑問は非常に全うでありながら、今言っではいけない疑問ワースト一位だったと、後で気づいたのだった。

「なんで先輩が知ってんですかぁ！！！」

その俺の叫びに先輩はため息と共に答えた、やはりお前か・・・と。疑問符が頭の周りをくるくる回っている俺に先輩はこういった。

「テレビでも見てみる、あーチャンネル8だ」

その台詞に迷わずテレビのリモコンに手を伸ばす。

そして見た。

今台所に立っている八意さんが買い物袋を片手に、何も付けず大空へと飛んでいく映像をー。

「や、やごころさぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！！」

先輩の事も忘れて大声で叫んだ。電話越しに何か叫んでいるが、もう知るか！

今の俺はこれ異常なくらいに混乱している、というか最近混乱してばかりだな俺は！

とにかく俺は混乱をどうにかして欲しかった
納得する理由が欲しかった
解決するべく答えが欲しかった

だからこそこの混乱の大元凶である八意さんに駆け寄った。
今の俺にはそれしか考えられない。

「や、八意さん！て、てててれびい！」

声が異様に震えるが俺は一切気にかけない。

冷静な自分が「なに言葉を囁んでるいるんだ」と失笑する。
しかし今は気にかける事項がでか過ぎてもう何がなんだか分からない。

そんな小さなことには目移らないのだ。
うおー

そんな俺を彼女は『？』で答え、今しがた見ていたテレビの画像に視線を移し、

「あれが？どうしたの？」

とおっしやられた。わふー、くーるびゅーていー

「いや、どうしたもこうしたも！何飛んでるんですか！っーか飛べたんですか！？」

あれ？おかしいな、話が噛み合わない。

そもそもおかしいのは彼女か？俺の方がおかしいのか？俺ら人間は何にもなしに空を飛べたか？

・・・・・・・・・・・・・・・・うん飛べない。

じゃあ、おかしいのは彼女だ。そうだそうに違いない。

「おかしいですよ！やごころさん！」

再び部屋に俺の絶叫が響き渡った。

「靈力で空を飛ぶのが普通ではないの？だったらどうやって地上の民は月へ到達出来たのかしら？」

「純粋科学力で宇宙へ昇ったんですよ。そもそも靈力なんてここでは稀有な代物なんです。俺ですら珍獣扱いされるんですから」

「え？そんな！地上の民は結局靈力と科学の融合がないまま成長したの！？・・・・・・・・なんて、原始的な」

まずそこからか、彼女はあまり俺たちが住む世界に興味なかったのかもしれない。

となるともし俺が幻想郷に行つたと仮定したら、あつちの常識に馴染めるのかという問題だ。

霊力で空を飛ぶ事が常識の世界だと考えると他にはどんなものが常識だろうか？

幽霊に絡まれて世間話するのが常識とか？

それとも死んだ人間が生き返るのが常識とか？

・・・どちらにせよ、あまりこちらの常識に捉われてはいけないな、まだ行かつて決まっていけないけど。

その間、八意さんは驚きの声を上げた後「・・・そうか穢れが・・・」とか「・・・だからこれほど時間を・・・」と呟いていたが、俺はふと別の懸案にぶつかった。

何故先輩はピンポイントで彼女の名前を言い当てたのだろうか？

部屋の隅に転がった携帯を眺めながら俺はそう考えた。

八意さんと朝食を取った後、俺はノートパソコンを開けてネット回線を繋げる。

ちなみに八意さんは俺の部屋においてある小説を手にとって読んでいる。

速読というのだろうか、司馬某作の分厚い本で、一ページに細かい

文字が2行にわたって出来たものなのだが、ほんの10秒ほどで次から次へとめくって行く。

いや、幻想郷ではこれが常識なのかも・・・と自分を納得させパソコンでニュース項目を開けた。

『スーパーマーケットに飛来するする女性！？』

。。。市のスーパーマーケットで、夕飯の食材を求めにやってきた主婦のなかに、空中を浮遊して来た女性が、買い物をして再び浮遊して帰宅するという事態が起きていたことが明らかになった。

一部始終を撮影していた一人がウェブサイトに掲載、そのコメントのなかで「空から降りてくる少女^{シート}を探すために空を見上げたことはあるが、実際に起きるとは想像もしていなかった。幻想郷は幻じゃないんだ！」と述べている。

19日午後6時15分ごろ、スーパーマーケットのもっともピークに達した時、一切の飛行器具らしきものを持たず、買い物袋片手に東方Projectの登場人物の1人『八意 永琳』と思しき人物が、空中を文字通り滑空して訪れた。

その場に居た100名近くが絶句する中、八意 永琳と思しき人物は魚介類や葱、白菜などを買い込んで、再び夜の闇に消えていった。

東方Projectとは、同人サークル『上海アリス幻楽団』の作品群の総称であり、主にZUN氏一人が制作している「弹幕系シューティング」を主軸としている。

ニコニコ動画という情報媒体を主軸に、巷でささやかながら急速に広まったゲームの一つであり、八意 永琳と呼ばれるキャラクターはそのシリーズの一つに登場するボスの内の一人である。

何故この場所に現れたかは、完全に不明となっており、製作者のZ

UNも口を噤んでいる。』

東方Project・・・

シューティング好きの先輩がやたら押していたゲームだったか、なるほど道理ではれる訳だ。

昨日に見た幽霊の話の逐一先輩に報告したからばかりだったかな、もしかしたら先輩は八意さんのことを知って進めたのかも・・・いやそうだろう、あの先輩だからなあ。

試しに幻想郷で調べてみたらwikiが頻繁に更新されるほどに知名度は高いらしい。

調べてみると、なるほど・・・わからん。

冥界、妖精、吸血鬼に閻魔。

確かにそれは幻想だろう、昔の文献に載っているだけで今の現代社会は居るとは真に受けないだろう。

というか昔の話でも『いた』と真に受けるやつなんて居ないだろう。

ちらりと外を見ると、相変わらず騒がしい。

後で改めて外を見たら、騒がしいのは登校中の学生ではなく、多くのいい大人がカメラやビデオを片手に、犬のように走り回っているのだった。

中にはプロも混じっているのだから笑えない。

ごついアンテナつけたワゴンが牛歩のスピードで走っていて、しかも中の人間は全てのものが不自然に見えるのか、一箇所に視線を写すということをしてない。

確かにここは住宅街で車の往来はほぼないが、一言やめてくれといいたい。

俺はため息を一つもらしてパソコンの電源を切った。

調べた所、幻想郷の管理者は『八雲 紫』という妖怪らしい。

妖怪って・・・なんだよ、とも思ったがそういうものなんだから仕方ないんだろう、俺にはさっぱり理解できないが。

俺はごろんと横になる・・・あれ？頭に枕が置いてある、こんなところに置いたっけ？

ちらりと八意さんに目を向ける。

目が合った。

笑いかけられた。

視線を外した。

ゴホンッ！

この八雲はいつたい八意さんをどうするつもりだろうか？

たしかに八意さんは大きく行動をとってその存在を世に知らしめた。それは幻想郷の理に反するはず、だがその一方で東方Projectという幻想郷ほぼ同系列の話を容認している。

つまりこれは同列とは言え本質が違ったため放置したか、もしくはその行為そのものが幻想郷に利する事ゆえに容認したかのどちらか、か。

前者だった場合どうなるか？

本質は違えどその根本にあるのは『秘匿』だ。

『これほどしか情報の相違が激しいのなら大丈夫』というのは逆に

言っと『一部分とはいえ相違が合致したら拙い』ということにならないか？

そうなるとう八意さんは非常に苦しい立場になる。相違が激しかろうと、類似するものがあり、それを証明する存在があるなら幻想は幻想でなくなる。

つまり幻想郷の崩壊、それを管理者が許す？許さないだろう。

いや、それ以前に何とかしてこの状況下に火消し行為を行うはずだ。俺ならそうだな、さっさと八意さんを始末して情報の風化を待つのがベターだろう。

昔妖怪が本当に存在していたのなら、今の現状を鑑みたら分かる。彼らはいつぞや存在しないものとして扱われたのだからな。

では後者ならどうか？

東方Projectという同系列の話が広がって幻想郷が得することとは一体なんだ？

もっとも可能性が高いのは神や妖怪の為に行われているという事だろう。

神や妖怪は人々の信仰なくして存在できないと書かれていた。

神は畏怖や尊敬を糧に、妖怪は恐怖や憎悪を糧に。

人に想われるというのはそれほど重く大切なものなのだ。

人に慕われ神になる、釈迦やキリストの様に。

人に疎まれて妖魔に落ちる、吸血鬼や鬼の様に。

そしてこの東方Projectはそれらの想いを増幅するための神輿として使われたのでは？

そこまで考えて俺は軽く頭をかいだ。

確かに東方Projectは幻想郷の謎を紐解く優秀な資料だが、

あくまでこれはゲームであり現実ではない。

恐らく前者としても後者としても肝心な部分は隠されている可能性の方が高い。

それなら・・・と俺は視線を八意さんに向けた。

（直接聞こうじゃないか、なんせ彼女はデジタルな情報体ではなく、現実存在する人物だからな）

そして俺と八意さんは、その日一日を幻想郷の話に終始した。

ところで明日の仕事はどういう顔でいけばいいか、誰か教えてくれ。

4話 おかしいな、話が噛み合わない（後書き）

初めて感想もらいました、ひゃっほーい

p tがまたあがったよ！やったねジラちゃん！

・
・
・
・
・
・
・

身内にばれたらバイツァ・ダスト！

いいや限界だ！押すね！

5話　なんか腹立ってきた（前書き）

ようやく説明臭い文章からおさらばだ！
なによりえーりん書いて癒されるぜ！

5話　なんか腹立ってきた

カタカタカタ・・・

「八意　永」 「検索」

「何を検索しているのかしら？」

「!？」

「あら？私に興味をもってくれたの？うれしいわね・・・でも」

カチカチカチ

「八」 「検索」

「女の秘密に無断で覗くのはマナー違反だと思うわ」

「・・・はい、すいません」

結局八意さんって何なんだ？

「さて・・・」

たった一日休んだだけで久しぶりに会社を見上げたような気がする。

5段ほど続く階段の向こうに2箇所ある自動ドアと、緊急事態が起きたら一番に心臓発作を起こしそうな老警備員が両脇を固めている。前から思っていたが、あの警備員何か意味があるのだろうか？人件費削減といっても、これはいかなものか。

・・・まあ皆文句は言わない。誰だって地方に転勤なんてしたくないだろう。結局はしがないサラリーマンなのさ。

さて、それよりも当面の問題は

「まじ先輩になんて説明しよう」

苦虫を噛み潰したような渋い顔を作って、気力なく階段を上る。なんで俺あんな返答したんだろう・・・

しかも折り返しの電話も結局しなかったしな、怒ってるだろうなあ。

頭をガシガシとかき乱す。いや、それだけならいいんだ別に、それ
だけなら俺もここまで悩みはしない。

先輩がいかに厳しいとはいえど、分別を持った立派な大人であり模
範だ、話していい話と悪い話の区別はしっかりしている。

早々に他言することがない上に、謝って事情を説明したら済む話で
ある。

さすが先輩、かつこいい。ただ目つきの悪さが残念。

しかし、

「おい、今度の休みに。。。にっこうぜ」

「なんだよ、あのニユース興味あんのかよ」

「それもあるけど、目撃者情報募集してるらしいんだ。有用な情報
だと金一封でるらしい」

「マジか！・・・いや、まあそうだよな。この現代社会で魔法が存
在するかもって言うんだからなあ、聞いた話だとイギリスもその話
にお熱なんだと」

「あそこはポッター発祥の地だからな。そういうファンタジー的な
ものに飢えてんだろ」

「はあ！？藤岡あのやろっ、この時期に有給とりやがったのかよ！」

「『俺の嫁を迎えに行くんです！』っていつて人事にこり押してた

な。後で見たけど左遷リストにそいつの名前新しく入ってたよ」

「馬鹿じゃねえの？」

「ちなみに俺も明日有給とった、嫁が俺を待っている」

「おいしい！」

これだ。これなのだ。どこ歩いてもどこ見てもその話題で持ちきりだ。

今朝のニュースで見た話だけど、昨日の昼ごろ、魔法を求めた中学生が集団で学校を抜け出したんだと。やめろ、これ以上俺をネガティブな気分にはさせるな。

インテリ学者最強の呪文『集団催眠説』にも期待したのだが、目撃者があまりにも多すぎてそいつらも肯定しだす始末、勘弁してくれ。もし俺が幻想郷とやらの誘われていることがばれたら？想像したくないね！

先輩経由はほばないと信じたい。それじゃなくともでも誰かが『八意さんが俺のマンションに入っていくのを見た』なんて言い出したら・・・

「おはようございます」

「おはようございます」

俺は受け付け嬢に軽く挨拶をしてタイムカードを切りに関係者用の扉を開けた。

うぐい、今日一日俺の胃腸に幸あらんことを。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

そして開幕1秒で諦めた。無理だ今日から俺は胃腸薬常用者決定だ。関係者用通路には鋭い瞳、なのだがあまりに鋭すぎてもはや線になつてる先輩が壁にもたれ掛かり、俺の到着をまっていたようだった。思わず背筋を伸ばすように仰け反り、一步引いてしまう。口元がなんかもう色々な感情が混ぜあわり、不気味に引き付く笑みを浮かべてしまっている。

「・・・・・・・・・・よう」

最初に口を開けたのは先輩だったが、俺は先輩の背後に雌伏す猛獣の影を幻想して返事することが出来ない。ひたすらに不気味な笑みを浮かべている俺をスルーしつつ、腕時計を確認しつつ口を開いた。

「タイムカードの時間、大丈夫か？」

その一言で俺は覚醒した。

まずい、一応余裕を持つて家を出たが周囲の話に気をとられ、いつもより進行のペースが遅かった。

「あ、はい。すみません押して来ます！」

俺は慌ててタイムカードを切りに先輩の横を通り過ぎようとして、肩をつかまれ

「今日は購買で飯買って屋上で食うぞ」

と言って肩を切って自分の仕事場へと足を向かわせた。
一方俺は青い顔をしながら俯き加減に立ちつくすしかなかった、もう既に胃が限界だ・・・

もうすぐ聖夜は近い。

女たちはその日に向けて自身を磨き、男どもはその日に向けてお金を貯める。

各社企業はビッグイベントに便乗して様々な企画を立ち上げ、少しでも多くの実績という名の金を欲している。

企業という組織から、社員という個人まで聖夜というイベントに振り回されているのだ。

そして話題の中心は常に聖夜がその場所に居座って、その毎年の現

象は変わらないと思っていた。

それが今変わった。・・・いや正式に言うならば昨日だろうか。

街頭映像が飛空する女性を流し、画面が切り替わると魔法というものが存在するかもしれないなんて、普段から考えればこいつら全員頭のネジが緩んでいるとしか思えない議論を繰り返している。

しかしそれを眺める遊歩道の歩行者はまじめな顔して、だというのに期待に満ち溢れた表情で街頭映像に目を向けている。

それはサラリーマン風の男性だったり、子供を引き連れた一児の母だったり、ジャンクフードを片手に歩く学生だったり、中にはやや肥満型ともいえるリュックを提げた野郎共の集団は鼻息を荒くしていたりもしながらそれを見ている。

そしてそれは俺の働いている会社の中でも変わらない。

一昨日まで爪の手入れに勤しんでいた斜め前に座る2つ年上の笹原さんも、すり鉢といわれヒラの社員から忌み嫌われていた長山係長も、俺の隣座る同僚の上野も皆が皆、魔法の有無について協議を繰り返している。

その顔は初めてサンタクロースを見た子供のように、瞳を輝かせ、時には顔を紅潮させ語り合っているのだ。

その一方俺は顔を青くして頭を覆っていた。

（ぐうおおお、なんじゃこりゃあ！なんで皆こんな事まじめに協議してるんだあ！）

俺が最初に思った事は意外にみんな『東方Project』について知っているということだ。

さらに言うなら隣に座る上野は「えーりん！えーりん！」とか「おま・・・その情報 k w s k !」とかなんかよく分からん日本語を使っている・・・ k w s k ?

いつも堅苦しいなまでに真面目で無愛想な奴がこんな事言っている。つかお前は八意さんの事好きなのか？

「ああ！？おいよつく聞けよ槐い。俺はなあ東方Projectも、えーりんも、咲夜さんも、超・大・好き・だあ——っ！愛していると言ってもいいね！」

「あ、ああ。そう……」

「つかー何？その『八意さん』って？東方厨なら『えーりん』だろ
があ！」

といいながら右手を全力で振り始めた。

何だこいつ。というか、いきなり人の名前を言うのか？本人の目の前で？許可もなく？

無理だ、俺は絶対に・・・そもそもこいつも本人目の前にしたらいきなり名前言うのだろうか？

．．．．．いいそうだ。なんか腹立ってきた。

「おいお前ら、仕事しろ」

その時、歪みないいつもの先輩が瞳を刃の様に鋭くさせて皆をにら

みつけた。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

まさに鶴の一声だった。

和気藹々とした仕事場が半瞬にして静まり、残ったのはカタカタと言っキーボードを叩く音だけが響き渡る。

まさに圧巻、下には強いすり鉢係長も一所懸命仕事をしている・・・ふりだと思う。

かく言う俺も背筋を伸ばし気を引き締めて仕事に入る。・・・尻が痛い。

「槐、飯食っぞ」

誤魔化せないかところり食堂へ向かおうとしていた俺を先輩が襟首を掴んで押しとどめた。

いや、まあ分かつてはいたけど。俺はドナドナを脳内再生しつつ先輩に連れられ屋上へと向かっていった。

ある晴れた 昼さがり 屋上へ 続く道
先輩が ずるずる 俺を 引き摺りゆく
かわいい俺 引き摺られて行くよ
虚しいなひとみで 見ているよ
ドナ ドナ ドナ ドナ 俺を 引っ張り
ドナ ドナ ドナ ドナ 俺の頭が ゆれる

「そろそろ自分で歩けよ」

「・・・はい」

5話　なんか腹立ってきた（後書き）

大量のタグを見ていいなあと思う

反面、永琳好きな人以外余分に来て欲しくないから現状で満足

さらに言つと俺の駄文が多くの人に见られないから一安s（ry

という訳で仕事行くので短いです、では

6話 いこう、幻想郷へ（前書き）

先輩との会話は基本的に時間かかるなあ
そんなわけでいつもの2倍かかりました

6話 いこう、幻想郷へ

屋上に出ると吐く息が白く色づき、本格的な冬の到来を感じさせる。聖夜までの後3日を数えるだけだが、今だ雪がちらつくことはあっても積もることはない。

もう少し北陸にいけば違うんだろうけど、そう思っながらホットの缶コーヒーを片手に身を竦ませた。

俺たち以外の人影は見えない、見えるはずもない。確かに暖房の効いた仕事場は少々頭がボーッとするものの、こんな寒空で昼食を食べる馬鹿は居わけないよね。

「・・・・・・・・」

そんな馬鹿が今現在二人屋上で缶コーヒーとサンドイッチを片手に黄昏ている。

いやもつとも今から話す事は馬鹿みたいな場所だからこそ話せるものがあるが。

俺はコーヒーを一口啜り口を開いた。

「先輩東方Projectってご存知でしたよね」

まあ今話題にもなってますけどね、と俺は続けた。

その間先輩は何か口を挟むことなどせず、かといって急かすような雰囲気もせずビルの下を走る車の影に目をやっていた。

「もしかしてですが、俺の見た幽霊の人物が八意さんに似ているって想像ついてました？」

「まあな。長髪銀髪赤青服装なんて俺は八意永琳くらいしかしらん」

その時先輩が始めて口を開き俺の話を肯定し、ペリペリとサンドイッチの袋を開封してぱくりと口に放り込んだ。

「しかしお前から話を聞いたその日に、んなことあったなんて想像すらつかなかったよ」

「違い不是吗、特に俺なんか元ネタしらなかったからそうとう混乱したんですよ」

俺も先輩と同じくサンドイッチを開封して一口、シーザードレッシングを主軸にレタスとハムの香りがふわりと広がった。定番ながらうまいなこいつは、個人的にはスライストマトも一切れ入れて欲しいが。

一時俺と先輩との間にものを咀嚼する音だけが響きわたった。俺は口の中のサンドイッチをコーヒーで流し込み話を続けた。

「実は八意さんに幻想郷へ来ないかと誘われまして」

この言葉に先輩は初めて反応らしい反応を見せた。缶コーヒーを傾

ける動作が一瞬とまり、再び動き出すという蚊がとまった程度の小さな変化ではあったが。

それに構わず俺は続ける。ここから俺がもっとも話したい、相談してみたい事だったからだ。

「後5日間までに俺はここに留まるか幻想郷へ行くかを決めなければならぬんです。しかし・・・」

全て話そう。残念ながら俺は頭の回転はいいほうではない。

自分で見たもの聞いたもの信用するというものの場合によりけり、時としてそれが逆に自分という視点のフィルターしか見てないと言うことになりかねない。

それは『独りよがり』ともいえる。たまに面接とかで「自分のことを客観的に見ることができます」なんていうのははつきり言おう、馬鹿だ・・・そうだろう？昔の俺よ。

「自分のこと」というのは置き換えれば自分しか見てないということになる。

本当に客観性がある奴なら多くの人と情報を共有して、そしてそれを独自で纏め上げる技術をもつ。これこそが本当に客観的視野で見ることが出来る人物。

だから今回唯一情報を共有している先輩に全てを話し情報の比較を図りたい、俺は聖徳太子や諸葛孔明ではないのだ。

正確な情報を整理するのならば他者の情報との比較すれば容易く、さらに先輩は素晴らしいことに大人の良識と寛大さを兼ね備えつつ、先を見据える慧眼ももっているパーフェクト超人。

俺なんかに及びもよらない決案を出してくれるだろう。

「・・・という訳です。幻想郷は本来隠蔽し、幻想たるもの。しかし今回はどう考えてもおかしい。その上ではたして行っていいかどうか・・・」

皆『幻想郷が実在するかもしれない』という懸案に夢中になって他のことには目を向けていない。

確かにもし俺が当事者ではなかったらこんな事考える気すら起きなかった。

ただその他大勢に紛れて真面目な顔で魔法の有無について話すのだろうか？

何故今まで表沙汰にされてなかったものが何故今になって露になったなんて考えただろうか？

そして、映像にうつる八意さんに俺はやはり心ときめかせていたのだろうか？

そこまで考えて俺は軽く首を振り、頭をかいた。

馬鹿らしい、今はifについて考える必要なんてない。

「・・・俺から言わせれば問題はそこではない」

そう答えた先輩に俺は視線を移す。

先輩はいつものモーションを取り、すっかり冷めたであろうコーヒを一息で飲みきった。

「問題は何故お前か、だ。そしてもう一つは、何故幻想郷を示唆する行動をとったにも関わらず八雲紫が動かないのか、もしかすると

だがこの事態を含めて既に決定事項なのかもしれん」

前者の疑問にはすぐ答えられる。俺の先祖に友好関係があったらしくて、だったか。

しかし後者は正直先輩がいったい何をいつているのか分からなかった。

「ちょ、どういうことですか！つまり八雲紫という人物は八意さんを利用してこんな自体を！？」

「そうかもしれんという話だ、さらに言うならば俺の知識にある八雲紫と八意永琳が本物ならこんな初歩的なミスはしないと思う。設定は確か『妖怪の賢者』と『月の頭脳』頭が切れるとかいう次元の話じゃない。その存在がこの事態を容認しているということは、この状況そのものが幻想郷に被るデメリットを差し引いても行わなければならない、その必要がある訳だ」

先輩はそう答え俺に向き直った。

「それがどういったものなのか、情報が少なすぎる今は分からないが幻想郷がこのまま干渉を続けるようならば、お前が幻想郷へ行こうが行くまいがこの世界は変わっていくだろう」

それはそうだろう、この世の中は大きく変わるに違いない。霊力とか魔力とかいう謎エネルギー、それは単純にこの現代社会が

もつとも危機感を募らしているエネルギー問題の解消の主軸として扱われる。

なんせ霊力とは、加工しだいで一切の飛行機器を持たずしてリアル空中散歩を可能にするのだ。

霊力1に対するエネルギー変換効率はどういうものかまで突き詰められるのであれば、八意さんが呟いていた霊力と科学の融合が可能になるのではないだろうか。

そうなれば、全世界で新エネルギー革命が起こるだろう。この東方の島国を震源地として。

「お前にあるのは視点の違いだけさ。幻想郷へ旅立ち俺たちの世界が変わるのを傍観するか、ここに留まり変化という濁流に飲まれ流されるかはな」

先輩はそういつて俺に選択肢を投げかけた。
幻想郷へいくか、留まるかを・・・しかし、

「この変化に干渉するっていう選択肢はないんですか？」

俺がただ時代の流れに流される言い方が癪に障る、断固抗議だ。
しかし先輩は俺の抗議を面白そうに鼻で笑った。

「お前が、か？無理だな、到底敵わん。例えばもし、今年正月のK-1で魔裟斗悲願の復帰戦があったとしてその挑戦者がゾウリムシ

だ。どっちが勝つと思う？そういうレベルの話だ」

そこまでいうか！？つか俺ゾウリムシかよ！

その言葉に俺はふて腐れたようにそっぽを向いて、残りのサンドイッチを口の中に放り込んでコーヒーで流し込んだ。

先輩は俺を見ながら何が面白いのやらニヤニヤ笑っていたが、ふつとため息を一つついて再び口を開いた。

「誇張でもなんでもない。本当にお前の間にはそれくらいの差がある。納得したいのであれば、お前が幻想郷へ行つて答えを見つけるんだな、案外八雲紫はこちらと幻想郷を繋ぐ外務官としての役割でお前の幻想郷入りを容認したのかもしれないな」

先輩は空のコーヒーの缶を弄びながら、今俺がもっとも心が動くであろう言葉を言い放った。

「それに、八意永琳のことがわすれらるのか？」

「……………忘れられる訳がない

その言葉は反則だ、卑怯だ、意地悪だ

先輩の一言でもう答えが決まってしまった。

たぶん、俺には面倒くさいことが巻き起こるのだろう。

幻想郷と俺たちの世界を繋ぐパイプとして俺は使われるのだろうか？
それとも幻想郷宣伝の為のスピーカーとして俺は使われるのだろうか？

はたまたなんてことはない、ただの駒として俺は使われるのだろうか？

上等だ、やってやろうじゃないか。恐らくこのチャンスを逃したら次はない。

降りかかる火の粉を払いながらも俺は進んで行つてやる。

たとえ八意さんは誰かの影を俺と重ね合わせてたとしても、それでも構わない。

そもそも出会いとは、そんなものじゃないか？

昔初恋の人に似ていたから、とか。

趣味が俺と同じだっただけ、とか。

最初はその程度でいい、問題はその過程。

俺はやる、やってみせる。

彼女のそばに並び立つために、なんだってやってみせよう。

もう迷いは消えた。いこう、幻想郷に

先輩は俺の表情を見ながらにやりと笑った。

「ま、がんばんな」

「そついえば八意永琳は今何してるんだ？」

冷たくなつた缶をゴミ箱に投げ込んで先輩は聞いてきた。

俺も続けてゴミ箱に向かつて投げ込んで、外れた。

くそっ、と悪態をつきながらのろのろゴミ箱へ近づいて缶を拾い上げてその中にぶち込む。

「とりあえず目立たないようにしてくださいって釘さしてますので家に籠ってるかと思いますが」

俺の返答に先輩は一瞬言葉を詰まらせた。

不審に思つて振り返つて即後悔した。その鋭い瞳が俺の刺し貫いて
いるからだ・・・な、なんなんだ！？

先輩は俺を視線から外さず、外の凍えるような空気にも負けないような声を上げた。

「家って、お前のか？ってことは、泊ったのか？」

・・・・・・・・・・・・・・・・あ

一陣の風が屋上を撫ぜる。

俺が思わず身を震わせたのはその故だと信じたい。

ゆっくりと後ずさる俺に合わせるように先輩が歩みを進めていく。

「知ってるか？俺はな、13日の金曜日にジェイソンがくそつたれなカップル共に正義の鉄槌を下すシーンが大好きなんだ」

「ちょ、ちょちょっと待ってください！八意さんとはそんな関係じゃないですって！そもそも八意さんは俺の影を追って・・・・・・・・」

俺の引きつった声に先輩は意を解さず、すばやく踏み込んで俺の頭を鷲掴みにした・・・・いてえ！！

「能書きは垂れたか？じゃあクタバレ」

「あ、あががああああががあああああああ！！！！！！！！！！」

刑部先輩26歳

スペック：S+

今まで付き合った彼女：2人

付き合った期間最長：3ヶ月

振られた理由：なんでいつも怒ってるの？↑怒ってない

モテない理由：目つき・よく不良に絡まれるから

仕事帰り、家へと歩みを進める中、俺は思考の底を漂っていた。

なんせ幻想郷へ行くという決心はついたものの、やるべきことは山
積みだ。

まず会社は、まあ退職しなきゃ駄目だよな？

この時期このご時勢に退職か、いてえなあ・・・

ガリガリと頭をかいて今やらなきゃならない身の回りの整理に頭を
悩ませる。

とりあえず後五日間で全てのことに決着をつけなければならない。
まず

- ・会社の退職願

- ・アパートの明け渡し

- ・親に事情説明

これは確定だ。

会社の退職は色々引き継ぎとかあるし、つーか聖夜前のこの時期だし。

もしかしたら聖夜までは仕事はしないといけないかもなあ。とりあえず辞職届は書いとして、次はアパートの明け渡し。

不動産屋に解約の連絡して手続き。

その後に荷物を出して、冷蔵庫とか洗濯機とかどうしよう。処分しようと思ったら以外に金かかるからな。

最後は親だな。

ま、俺の家は放任主義だからそれほど強くは言われまい。

むしろ女性のために全てをなげうった言ったら、逆に喜ばれそうだ。変態だからなあ俺の家は。

後は貯金全てを家に渡したらいいだろう。

後はそうだな、幻想郷に何を持っていこうかな？

電気通ってるのか？

電波は？水道は？

うーんネットで調べたいところだけど、八意さんが許してくれるかな。

そこで思考の渦から身をあげた。

いい香りがする。今日はなんだろう？これは恐らく・・・ビーフストロガノフ！だと思う！

いいねえいいねえ最高だね！

俺は期待で膨張した心を胸に家の扉を空けた。

6話 いこう、幻想郷へ（後書き）

俺キモス

そういえば最近気付いたけど感想もらったくらいではpt上がらないですね

素晴らしい！素晴らしい！これは本当に素晴らしい！

これで心置きなく「感想くれ！」って言えmas・・・

7話 何で俺はこんなに阿呆なんだ（前書き）

年内には幻想入りしたい

つーか二週続けて先輩話にするところだった

あとで読み直して（誰得？）とか思わなかったらえーりんまた出な
かったは

慌てて消した、そしたらこんな時間かった、サマソ

7話 何で俺はこんなに阿呆なんだ

深呼吸を一つ、気合を入れて覚悟をきめる。

これを提出したら後戻りは出来ない、全ては一からのスタートとなる。

それでいい、しがらみを残して前に進めるか？

「主任、すいません。お話があります」

頃合やよし。さて、奇妙で不思議な一步を踏み出そうか。

俺の声に検案していた書類から目を離し、主任が俺を珍しいといった表情で迎えた。

あまり主任とは接点がないため、こう話す機会はあまりない。そしてこれが最初で最後になるかもしれない。

「これを・・・」

俺は黙って一つの封筒『辞表届け』を提出した。

本日の昼休み、再び俺と先輩は屋上でコーヒー片手にたむろしている。

話す内容は主に業務の引継ぎだ、俺が出した退職希望は25日聖夜である。ぶっちゃけ一番忙しい。

辞表を提出した後が一番大変だった、主任は俺が突然退職するといつて『やることやってからやめろ!』の一点張り。

しかたない、いきなり辞表届けを出す俺が悪い。本来なら1ヶ月前くらいに出すもんだが、俺はたった4日間で辞職したいですといったのだから。

あまり周りに迷惑は掛けたくなかっただけに心苦しいが、もう期限が迫っている。八意さんももう少しゆとりをもってきて欲しかったな。

さて、後は同僚の上野にも頼んどこう。今の彼の状態はちと心配だが、我慢してもらおう。

後去り際に彼に言っておかなくてはならんな

「八意さんは俺が奪う!」

ってな

昨晚はやる気持ちを抑え帰宅した俺に、八意さんが最初にかけてくれた言葉は、

「さいかち槐、後もう少しで出来るから、先にお風呂でもはいつてなさい」

・・・思わず結婚しているのではないだろうかと錯覚してしまいそうなシュチュエーションだ。

俺は軽く生返事で返して、洗面所付近で服を脱ぐ。

昨日から思っていたが八意さんは風呂どうしているんだろうか？

俺が仕事に行っている間に入っているとか・・・なかなかいいな。

い、いつもシャワーだったけど、今度浴槽にお湯でも入れて・・・

ゴン

そこで俺は頭を風呂場の扉に打ち付けて馬鹿な思考に緊急停止を命じた。

もうためだ、脳内が意味不明なデッドヒートを繰り広げている。主に理性と欲望の。

苦しい、狂おしい・・・溢れる。私の中から探究心という名の欲望が。

とりあえず、八意さん使用後湯船大作戦は保留にしといた。

ためだ、どんどん俺が駄目になっていくのが分かる。

だがしかし！八意さんが風呂に入っているのを想像してみろ！シャワーでもいいぞ！

・・・・・・・・・・・・・・・・

どうだ？

想像できたか？

な、なにかくるものないか？

八意さんの入浴中にのび太よろしく入るんだ。

でも彼女はシャワーの音で俺が入ってきたことには気付かない。

シャワーから流れる湯が彼女のスラリとした首筋を通ぬけ、豊満ではじける様な胸へと移り、それに反比例するようなくびれ、引き締まった腰へと流れ、極上の果実のように熟れたお尻のラインを通り抜け、ふつくらとした太ももへと落ちていく。

しつとりと濡れた前髪の滴り落ちる雫から覗かせる彼女の瞳は、ぬくもりに熱うかされ妖しく潤んでいて、ゾクリとするほど扇情的だ。彼女の全てが俺の急所を穿っている。白い靄が俺の視界を覆う、それはただ湯気だけのせいではなく、理性すら暴走している。

俺はふらふらとシャワーを浴びている彼女の柔肌をゆっくりと抱きしめる。

その時彼女は初めて俺の存在に気付き頬を上気させて「はあ・・・」と吐息を洩らした。

彼女の肌は赤子のように瑞々しく潤っていて、羽毛のように柔らかで、理性を溶かす熱をもっていて・・・

「うわああああああああ！！！！！！何で俺はこんなに阿呆なんだああ！！！！」

再び風呂場の扉を殴打する音が、夜の闇に響き渡った。

「いただきます」

ズズズキと痛む頭を我慢しつつ、両手を合わせた。

本日の夕食はビーフストロガノフ、みたいなものとサラダだった。

うん、確かに『みたいなもの』は失礼のような気もするが、なんせこのストロガノフ、色が緑なんだ。

思わず「何、これ？」と質問しそうになったが、正直今八意さんを正面から見る事が出来ない。もうどうしようもなく後悔している。妄想の中とはいえ八意さんに劣情を抱いてしまった。これがゲームや漫画のキャラクター話なら、悟った表情をして「何してるんだろう・・・俺」と呟けばいい。

が、しかしこれは現実、これが現実。

劣情を抱いた相手が目の前に居るわけで、しかもそれがゲームや漫画の登場人物で、さらには俺に飯まで作ってくれる。

なんか、申し訳ない。

俺に出来ることっていったらこの緑色のストロガノフを美味しく頂

くことだ。

えー、とりあえずサラダのドレッシングドレッシング・・・

「シーザーでいいかしら」

「あ、はい。それでいいです」

最近彼女の先読みスキルも慣れてきた。

気が利くってレベルではなく心を読んでいると思えなくもないくらい、俺の行動パターンを把握している。
なんだろう、勘がいいのだろうか？

とりあえず俺はこの緑色の物体をスプーンですくい上げた。

すごくいい匂いがするのだが、この色はどうにも出来なかったのだろうか。

ちよつとばかり躊躇したがぱくりと口に含んだ。

セブレット オーケストラ

その刹那突如として口内で行われる味の七重奏の管弦楽団に俺は愕然とした。

これほどうまいものがこの世に存在したのか・・・

昨日の和食も美味かった、だが俺はこっちの方が美味しく感じる。

この濃厚な味わい、しかし後味は吹き抜ける草原のように涼やかだった。

猛然と食べ始めた俺を八意さんは苦笑を一つ洩らして、自らのスプーンを動かし始めた。

「八意さんお話があります」

後片付けを相変わらずの謎の技術3分程度ですませ、居間に来た八意さんを俺は正座で迎えた。

彼女も俺の態度を察したのか方眉を軽く動かし、俺に倣って正座する。

大きく息を吸い込み氣力を充実させ、風船の様に膨れ上がったそれを弾き飛ばす勢いで声を上げた。

「決心ができました。俺は八意さんと一緒に幻想郷に行きたいと思っています」

俺の言葉に八意さんは目を細めて薄く微笑んだ。

「そう、決心がついたのね。分かっていると思うけど、幻想郷はこの地と異なる秩序で成り立っているわ。あなたはそれを受け入れられるかしら？」

「そのつもりです」

彼女の目を離さずに答える。俺は今もつ全てのしがらみを彼女のために犠牲にする。

家も家族も会社も友人も、彼女の傍に立つためにはそれらを全て置

き去りにしなければならぬ。

構わないとも。

俺は八意永琳という人物を一目みたあの時、価値観が音を立てて崩れ落ちるのを聞いた。

彼女に不釣り合いと感じながらも恋をした。

見惚れ、心酔し、憧憬した。

全てを白昼夢にして忘れ去ろうとした。

しかし俺は願った。

叶うのなら、叶うのなら、俺の声を拾い上げ叶える何かがあるのなら、もう一度……。

そして彼女はきた。

ここまでお膳立てされたんだ。

行くしかないよな？男が廃るか？もう二度目はないぞ？

「俺を、幻想郷へ行かせてください」

悩みに悩み、頭を抱え、心を砕いた。

その結果に出た答えだ、もう悔いはない。

俺の目を離すことなく見ていた八意さんは、このとき間違いなく『俺だけ』を見詰っていた。

「いいわ、あなたを幻想郷へ導きましょう。この地への清算は済ませておきなさい」

「はい、明日にでも会社には辞表でもだそうかと思います」

「わかったわ、それじゃ・・・私はこの部屋で食べる最後の料理を作るとするわ」

楽しみにしてなさい。そう言って悪戯っぽくクスリと笑った。

「そうか、八意永琳には話したか」

例のごとくコーヒーを手の中で転がしながら先輩は言った。

「ええ、仕事終わったら親に話してアパート解約して終了です」

「俺もいけないよな？」

「無理ですね、八意さんにも聞いたんですけど俺だけだそうです」

先輩は残念そうに「そうか」とため息とともに吐き出した後、コーヒーを一気に飲みきってゴミ箱に投擲した。

「ちょっと早いが降りるか、お前やること山積みなんだろう？」

おつとそうだった、俺が抜ける引継ぎがそれこそ星数ほどある。

得意先の対応とかも上野に話しておかねば。俺は先輩にならいコーヒー缶をゴミ箱に捨てて先輩の後を追った。

しかし時期が時期だけに本当にやることが多い。

通常勤務と平行して引継ぎを行わなければならないからな、今日は残業か。

八意さんの料理が待ち遠しいが、仕方ない。

ここで下手にサボったら俺の我欲のために、周りしわ寄せがいく。さて、後四日間どう問題进行处理していくかな・・・

そのとき仕事場には不釣合いな騒ぎが聞こえてきた。

得意先からの電話もする仕事場で騒ぐとは言語道断で、先輩はそんな喧騒が大っ嫌いだった。

案の定、先輩は苦虫をつぶした表情をしながら仕事場へと入っていた。

恐らく中で待ち受けているのは先輩の凶器的な視線と威圧感、そし

て一喝。

俺はこのことには関与してないから全然構わないんだけど、今中に入る気は流石にない。

ほとぼりが収まるまで通路で待っとくか、しかしまたピリピリとした雰囲気の仕事かぁ。

肩が一段階下がる、ため息一つつきたい気分だ。

・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

あれ？おかしい、喧騒が収まらない。

何故だ？先輩相手だぞ、主任だってその気になれば言うこと聞くのに。

不信に思った。

だってそうだろう？

今の今まで先輩の威圧感にやられていた皆が、今日に限って聞かないなんて理由ちよつと想像つかない。

おれは不信感を大に、それとほんのちよつぴりの好奇心を胸に、仕事場の中へと入っていった。

『ここです！このアパートに八意永琳らしき人物が入っていききました！』

テレビに映ったアナウンスの視線の先にはモザイクのかかったアパートが映し出されている。

俺は分かる、なんせ2年は見てきたのだ。間違いなく俺の住んでいるアパートだ。

『今日11時30分ごろ、。。。市。。。のスーパーマーケットでお昼の食材を求めにきた主婦の中に東方Projectの登場人物、八意永琳と思わしき人物が徒歩で買い物に来ていたところを、張り込んでいたカメラマンが見つめました。八意永琳は買い物を終え、今度も空中を浮遊せず徒歩で帰ってりそしてこのアパートに入ってしまったということです。では近隣住民の声を聞いてみましょう、現場の井本さん？』

ぶっん

いい音して思考がシャッターを閉めた。今日の営業は終了しました。

「俺、今から。。。のスーパー行ってくる！」

「おい！後15分で昼休み終わるぞ！」

「構うものかあ！俺はえーりんと！添い遂げる！」

え？何これ？

えつと確かに、ええ？

八意さん？目立つ行動はついていませんでしたっけ？

茫然自失、その言葉が今の俺に一番あうのだろう。

まさしく俺は何も考えることができず白い灰となっていた。
しかしその俺に色をつけたのは、

「・・・・・・・・おい、なんかこれ。槐さいかちのアパートじゃね？」

隣に居る上野の野郎の台詞だった。

上野の言葉に聞いていた周囲の喧騒が唐突と消えた。

上野は俺のアパートに遊びに来たことがある。

確かにアパートにはモザイクはかかっているが、周囲の風景は鮮明に映し出されている。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

数十の目がこの俺に向けている。
何をすればいいか？

要領のいい人間ならここですぐさまおどけて見せるか、上手い言い訳を考え付くのだろう。

しかし、俺は霊力を持っている以外は順当に凡人だった。

いままでそれに不満に思った事はない。周りと似ているということ
で一種の安心感すら感じていた。

だが、今それを呪う。

「……………先輩……………引継ぎを、お任せしま
す……………だあああ—————!!」

何も考え付かなかった。

だから俺は唯一できることをした。

すなわち……………!

「ああ！槐^{さいかち}逃げやがった!!!!」

「殺す！あいつは殺さなければならぬ!!!!」

「槐^{さいかち}……………!!!!!!」

そう、逃走という選択肢以外、浮かばなかった。

「うそだああ!!!!何故だああ!!!!八意さああああ!!!!」

「てめえ東方もろくにしらねえ癖にえーりんのこと喋んじゃねええ」

え！！！！」

「待て！そして死ね！！！！」

走る、走りぬけ、駆け抜ける。

階段を駆け下り、ロビーへ

受付嬢に駆け抜けざまに謝って、玄関口へ

このときばかりはまどろっこしく思える自動ドアを抜け出し、外へ

背後から迫る怒声と駆け音を

「タクシー！ちょっと待てえ！！！！」

通り過ぎるタクシーを思わず飛び出た金切り声で呼び止め、転がるように入り込む。

「。。。市。。。まで！！」

行き先を聞いた運転手は何か悟ったような笑みを浮かべて

「ああ、よくいるんですよ最近。なんでも女が空飛んで立って言う・・・」

「いいから早く出てください！！」

思わず叫んでしまった俺の声に運転手は慌てて扉を閉め、迫ってくる全ての喧騒を置き去りにして走っていった。

会社の中は騒然としている。

皆口々に槐さいかちに関する情報を共有しようと躍起だ。

俺はタバコを探るように胸元に手を伸ばし、いつもの定位置にガムしかないことに気付き、顔をしかめた。

「刑部くん、君は槐さいかちがあの飛行少女と関係しているってしっていたのか？」

主任がおどおどと道に迷った少年のような態度で俺に聞いてきた。さて、どうするか・・・

「さあ？しりませんね、それより今出て行った阿呆どもをどうしますか？槐さいかちはやめるとして他の上野、笹原、藤岡は仕事の時間になっても戻ってきませんか？」

「え？ああ、そうだね」

「魔法だかなんだか知りませんが、それで仕事をサボっていい理由にはならないでしょう。それなりのペナルティが必要だと思うのですが」

「そう、だね。うんまあ総務部の連中と話してみるよ」

そそくさと逃げ出す主任を目の端で確認しつつ、右手で唇をなぞる。

ああ、しかしあいつとの最後の言葉が「引継ぎお願いします」とは、全く舐めた後輩だ。たぶん二度、会えるかどうかになるだろう。大きく一つため息を吐いた。

「早苗さんに、会いたかったなあ」

7話 何で俺はこんなに阿呆なんだ（後書き）

モチベ維持が一番大変だは

後PV一万ありがたや
これで

初心者↓初級者

にジョブチェンジできました

読者の皆さん、愛してるとは言いません

ただ、好きだ！

だから評価はらめー本当にptがはっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2043y/>

東方槐無夢

2011年12月2日17時47分発行